

海運の重要性を学校教育の場で
～カイロ日本人学校で出前授業を実施～

当協会は、日本の暮らしと産業を支える海運をはじめとする海事産業の重要性を学校教育において取り上げていただくよう、教育関係者に対し海事施設等の見学会や授業への協力、資料提供等を国内外の教育機関に実施しております。

海上交通の結節点であるエジプトのカイロ日本人学校では、図書室の海運・造船コーナーに当協会が提供した資料が設置され、海事産業に触れる授業をこれまでも実施しています。

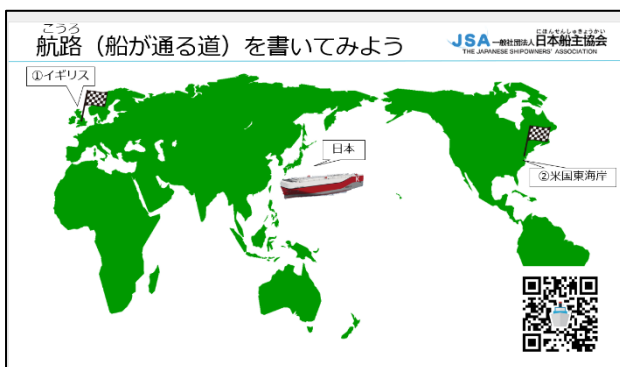
今般、カイロ日本人学校の小学 5、6 年生と、中学 1、2 年生が、修学旅行でスエズ運河を訪問する機会をとらえ、修学旅行に参加する児童・生徒 10 名を対象に、5 月 14 日に海運についての出前授業を、7 月 3 日に船長講話をいずれもオンラインで実施しましたので、その模様をお知らせします。なお、当協会の出前授業に加え、5 月 19 日には国際臨港開発センター（OCDI）による“スエズ運河”についてのオンライン講話が実施されています。（詳細は[こちら](#)よりご覧ください。）

【オンライン出前授業 概要（5 月 14 日）】

スエズ運河修学旅行の事前学習として、海運に関する授業を実施しました。まず、海運の概要について説明したうえで、エジプトや日本において海運が日々の暮らしを支える重要な役割を果たしていることを写真やクイズとともに紹介しました。児童・生徒は、事前に海運について学習していることもあり、クイズにも即答、海運に対する理解の深化が印象的でした。



400mのコンテナ船は、ピラミッドおよそ 2.6 個分



航路のワークシート

続いて、コンテナ船と自動車船を取り上げて、コンテナの種類や自動車船の荷役などについて説明しました。その後、自動車船が日本からヨーロッパとアメリカに向かう際、それぞれどのような航路を通るか考えて、ワークシートに書き込んでもらいました。事前に運河について学習していたこともあり、児童・生徒の多くが、スエズ運河とパナマ運河を通る正しい航路を描けていました。

最後に、安全運航に関連し、ソマリア沖・アデン湾での海賊対処活動を紹介しました。自衛隊員、海上保安官および各国の部隊が、現場海域で商船の護衛や哨戒活動等を行っており、これらの活動が商船の安

全航行、ひいては私たちの暮らしを支えていることを伝えました。

授業後、児童・生徒からは次のような感想が寄せられました。

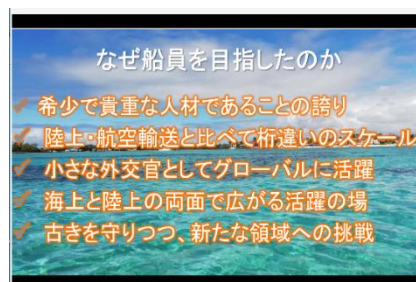
「アデン湾の海賊やそれにとまなう自衛隊や海上保安庁などの部隊の設置、船のセキュリティーの強化など、調べてもわからないことを知れて、この活動を行っていなければ、わからなかっただろうことについて知れました。なのでこの活動をふまえてスエズ運河の修学旅行やプレゼンに役立てていきたいです。」

「私たちの生活、あたり前はふだん人目に見えない多くの人によって支えられているというところを聞き、『本当にそうだ』と改めて思った。」（原文ママ）

【オンライン船長講話 概要（7月3日）】

スエズ運河修学旅行の事後学習として、当協会海事人材部の木村船長による船長講話を実施しました。

まず、航海士や機関士の職務内容について説明しました。船内でのコミュニケーションは英語であり、多国籍の船員が混乗する国際色豊かな職場環境が広がっており、「船上で外国の人と働く際には、言語や異文化理解はもちろんのこと、伝える力・聞く力も大切。わかっていることでも、言葉にしてきちんと伝える必要がある」と話しました。



船長講話のスライド



講話をする木村船長

また、船内での過ごし方について、コックがつくる様々な国の料理を食べられること、運動器具やゲーム等の娯楽も充実していることやインターネット環境も完備されていることなど、長期にわたる船内生活ならではの、様々な工夫がなされていることを、写真を交えながら伝えました。児童・生徒は、豪華な食事や、船上でバスケットボールをする様子に驚いていました。

船長講話の後は、児童・生徒が、海運や運河、水先人や、喜望峰への迂回、チョークポイントなどについてこれまで調査学習した内容を、スエズ運河修学旅行での学びにも触れながら、発表しました。

発表を聞いた船長からは「大変よく調べられていて驚いた。船は『安く、たくさん運べる』という話が発表の中であつたが、船・荷物の『安全』についても考えてみてほしい。」というコメントがありました。

また、同席していた機関長からは「スエズ運河ではシミュレータートレーニングの体験もしたとのことなので、ぜひ船員の操舵命令なども調べてみてほしい。船で使われている操舵命令は世界中どこでも共通していて、たとえば右に舵をきるときは『スターボード』、左の時は



児童・生徒の学習発表スライド

『ポート』という言葉を使う。」という新たな調査の切り口も提示されました。

その後の質疑応答では、「船酔いする人も船員になれるか」「どれくらいで船長になれるのか、船長になって何年目か」「船長として一番大変だったことは何か」「船内での電気、水道、ガスはどうしているか」「船の中ではどうやって発電しているのか」「船上でけがや病気をしたらどうするのか」等、次から次へと多くの質問が寄せられ、当協会の船長、機関長より丁寧に回答し、児童・生徒は、船員の仕事に強く興味を持った様子でした。



児童・生徒の質問に回答する当協会の木村船長と加藤機関長

授業後、児童・生徒からは次のような感想が寄せられました。

「座ってうすい毛布にくるまってねたり、非常食を食べて生活するサバイバル的なイメージでしたが、船の上でもちゃんと陸上と同じような生活ができるのかと、おどろきました。また、専門用語がかっこいいなと思いました。」

「日本人の船員さんが5万から2千人まで減っていると聞いてとてもびっくりした。船の上での生活も意外と快適そうで船長さんや船員のお仕事もいいなと思った。」（原文ママ）

当協会は引き続き、会員会社や海事関連企業などと連携しながら、海事産業をこれまで以上に教育で取り上げてもらえるよう広報活動を進めてまいります。

以上